

編者はしがき

「私は本書において一点の暗い影もない明朗の宗教を提唱する」

これは本書「はしがき」の冒頭で述べられた谷口雅春先生の言葉である。本篇のタイトル「常楽宗教の提唱」の名の通り、また別名「光明思想」あるいは「唯神実相論」と言われる通り、谷口雅春先生の教えは徹底的に明るい楽天主義であり、一切の苦しみも不幸も病気もない、どこまでも光一元の世界に包まれていると説く教えである。そして、それが単なる机上の空論ではなく、現実生活に無類の力を発揮していることは、夥しい人々の治病体験、経済苦解消の体験、その他の人生上の生活苦からの解放

体験によって実証されている。

本篇はこの徹底した谷口雅春先生の「常楽の世界の真理」が凝縮されて説かれ、併せて真の仏教の教えとは何かをも説かれている。だから本篇のタイトルが「久遠仏性篇」と命名されている。

さらに「はしがき」には、「私はこの書が出るに臨み校正しながら、自分自身の執筆であるところのこの書の語る真理に全く打たれて、反省せしめられた幾多の箇所があったことを告白する」とも述べられている。

そして、これまでの仏教、キリスト教などの既成宗教には暗い影が潜んでいるとして、以下の八点を上げておられる。

①人間には原罪や罪業がある。②罪や罪業を消すには苦行や献金や犠牲が要る。③救われるためには貧乏が必要である。④人間は死後救われるのであって、生きている現在ではない。⑤悟りを開くためには、家庭を持つてはならない。⑥悟りを開き、救いを得るためには本山への長途の旅と日数と金銭が必要である。⑦死後救われるに

ても、現在の生活苦が救われるわけではない。⑧一つの宗教は他の宗教と衝突する。それが家庭にも波及する。

これらの「暗い影」が生ずる根本原因は、在来の宗教がいつの間にか「神と神の国」「仏と浄土」とが、人間の現実界とかけ離れた遠い遠い存在になっているからである。しかし、谷口雅春先生の教えは、人間とは「神の子」であって、神は「光源」であり、人間は「光源から出た光」である。だから人間は常に神とともにあり、「神の国」に永遠に居続け、人間は常に「常楽」であると説くのである。

この徹底した「常楽の教え」に基づいて、谷口雅春先生は「宗教の暗い影」をすべて否定される。即ち、原罪や罪悪などというありもしない観念を解き放ち、苦行や犠牲を要求する宗教的束縛から解放し、「死後救われる」のではなく今既に救われているのだから貧困や健康問題やその他あらゆる人生上の諸問題は「心」によって解決する。そして、神道、仏教、キリスト教の神仏耶三教は別々の教えを説いているように見えるが、それぞれの根本教義は「人間神の子」の教えを説いており、同一である。

そのことを本篇は縦横無尽に解き明かしている。

このような谷口雅春先生の教えの根本義を踏まえて、本篇は真の仏教の教えとは何かをも解き明かされていく。特に浄土真宗では人間は死んだ後でない浄土に往生できないとの教説に対して、谷口雅春先生は次のように指摘されている。

「親鸞聖人の真意は、聖人が今生きていられないのでありますから聖人自身にきてみなければ判らないから、その著作によって窺うほかはないのであります。ともかく聖人は『臨終の一念の暁』には成仏する。生存中、阿弥陀仏の名号を聞信して大信心を獲得したときから臨終まではまだ完全に成仏していない、成仏することに断然決定されているから、『もう成仏したも同じ事だ』というように信じていられたように思えますが、『もう成仏した』のと『成仏したのと同じこと』というのとは同じことでない、やはり少々異うのであります」(一四四～一四五頁)

谷口雅春先生の著書には「親鸞の本心」という著書もあり、現在の浄土真宗の誤謬とも言える部分への批判も含まれている。しかし、谷口雅春先生の教えは「人間は神

の子なのであるから既に救われている」という大真理が根本義である以上、それに背馳する論説は決して認められない。

そして、谷口雅春先生は、なぜこのような間違いを犯したのかを次のように述べられる。

「もう成仏したのだ」とハッキリいわないで「もう成仏したのも同じことだ」という。そして本当に成仏するまでには臨終までの数十年又は数年間があるという。この臨終までの数十年又は数年間」を本当の成仏迄に何故置いたかというのと、「肉体」がその間は存続しているからなのであります。大信心を獲得して極楽行の乗車券は買つてあるから極楽行は決定済であるけれども、肉体が存続している期間は極楽への實際到着は難しいというのは、この「肉体」を、弥陀の救済力に対立し得るような実在だと、心のどこかに、思っているからであります。だから、「肉体」というものは念の投影たる仮相であつて、そんなものは本来無いもんじゃと知つたら、吾々は、念仏の心が起つた即時極楽往生出来るのであります」(一四五―一四六頁)

谷口雅春先生の「人間神の子」の教えは、同時に「肉体無、物質無」の教えでもある。この二つの大真理をもつて釈尊が説かれた教えに接するとき、仏教もまた、この二つの大真理を説いていることがはっきりとするのである。

ぜひとも仏教の教説の奥深さを本書によって味読していただければ幸いである。

令和二年七月吉日

谷口雅春著作編纂委員会